

審査の結果の要旨

氏名 宮本 城

本論文は、一般的に 5~6 世紀のものとするタミル二大叙事詩である、ジャイナ教叙事詩 *Cilappatikālam* (『踝飾り物語』、以下 *Cil.*) と仏教叙事詩 *Maṇimekalai* (『宝石の帯』、以下 *Mani.*) を、両者の比較年代のみならず、それぞれの叙事詩の複雑な形成過程をも論じた、二大叙事詩の成立に関する初めての総合的な研究である。

タミル二大叙事詩は、物語や登場人物という点で相互に関係が深く、ことに *Mani.* のヒロイン・マニメーハライが *Cil.* に登場し、*Mani.* で詳しく描かれることから、「双子の叙事詩」と呼ばれ、*Mani.* は *Cil.* の後日談に過ぎないと考えられることが多い。しかし、両叙事詩を丹念に読むと、そう単純に二つの叙事詩の関係を割り切ることはできない。

著者は、第 1 章でそのような二大叙事詩の問題を提起し、第 2 章で「双子の叙事詩」という見方の根源となっている、後代につけられた両叙事詩の「序文」を考察し、両叙事詩の作者が友人同士であるという記述は、*Mani.* の本文のジャイナ教をひどく敵視する部分からするとありえないし、そもそも *Cil.* の序文に出るサーッタンは *Mani.* の作者サーッタンと無関係であるとする。第 3 章では、*Mani.* が *Cil.* の後日談であるかどうかを、*Cil.* では剃髪して出家し仏教徒になった筈のマニメーハライが、*Mani.* では長い美しい髪をもち装飾品を身につけていることに着目し、*Mani.* に関してこれまでしばしば問題になってきた、マニメーハライがいつ尼僧になるのかという問題も含めて検証し、*Mani.* が *Cil.* の単なる後日談ではなく、*Mani.* ではヒロインは最後まで尼僧にはならないと結論づける。つづいて、第 4 章では *Cil.* の、第 5 章では *Mani.* の杵物語の破綻について検討し、*Cil.* では要となるマニメーハライの誕生を述べた第 15 章をはじめとした数章が、また *Mani.* ではもっとも有名な仏教論理学を述べた第 29 章が後の付加であることを論証する。

これまでも両叙事詩の比較年代に言及したものはあるが、それらが「文体に違いはない」などという一言で結論を導き出しているのに対し、本論文では両叙事詩を丹念に読んだ上で、説得力に満ちた新たな典拠を提示し、複雑に絡みあった糸をほごすかのように、両叙事詩の成立に関する諸問題を解き明かしている。ことに *Mani.* の本文のたった一行の記述から、*Mani.* はバクティ(帰依信仰)運動が始まって間もない頃の 7 世紀の作品であり、*Cil.* はバクティ以前の 5 世紀の作品とする部分は圧巻である。文章の一部に硬さが見られるが、本論文で提示された諸々の新たな典拠はそれを補って余りある。以上の理由により、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位にふさわしいものと判断する。